

岩手県立美術館、宮城県美術館 本格再開へ向け始動

アートによるワークショップが被災者の力に

東日本大震災から5カ月余り、被災県の美術館では館蔵品による常設展や自主企画展が随時再開している。直接の被害はなかったが、今年度の企



岩手県立美術館の「IMAここで展」会場風景

業の第1弾として「70、80年代生まれの美術家たち、IMAここで展」(9月28日まで、無料)が始まっている。若い世代の学芸員が中心となり5月末に企画を固め、県在住の出身の作家に声を掛け実現にこぎつけた。「作家の皆さんには、ほぼボランティアでのお願ひにも関わらず現状をご理解頂いている。また、震災後の現地視察からは頑張って新作を出品してくれた方もいました」と展示会を担当した吉田尊子学芸員は話す。

10作家による作品は絵画、立体、映像、デザイン

に展示されている。同館の教育普及チームが取り組んだのは、カラフルな積み木を使って自由な発想で家やお店、駅などの建物を作り「ユメノマチ」として現地で展示、その後作品をもらい受け、美術館内にも「マチ」を広げていこう、という企画であった。館内では現在も無料でワークショップに参加、鑑賞でき、被災地では陸前高田市、大船渡市、釜石市、大槌町を巡り、8月下旬には宮古市でも予定されている。企画展示室内のガラスケースが破損するなどの被害を受けた宮城県美術館は、併設する佐藤忠良記念館に続き7月5日から本館1階展示室でコ

レクシオン展(第II期)や小企画展「宮城の画家・大沼かねよ・二宮不二磨・加藤正衛」(12月18日まで)が、8月2日には2階展示室も開室し、所蔵品による特集企画展「絵本原画名品展 記憶の底のたからもの」(10月10日まで)も開催中だ。10月下旬には「フェルメールからのラブレター」展が予定され、特別展も再開する。

不要不急ともいわれる美術だが、時間の経過のなかで、既存作品の価値そのものが再認識されるとともに、作家、美術館、鑑賞者がそれぞれに美術の可能性と意義について新しい気付きを感じ始めているように思えた。